

ナースキャップの必要性に対する意識調査

東2階：○上嶋 照子・東2階一同

1. はじめに

私は、長年の手術室勤務から病棟勤務に変わり、ナースキャップをかぶるようになって7年になる。ナースキャップをかぶり始めた当初からピンでキャップを止めているところが気になっていた。またそれほど大きくない帽子なのにカーテン、点滴吊り下げ棒、ベットの近くで屈んだりしたときよく当たって邪魔なものだと感じていた。

今年の3月地下鉄サリン事件で、某大学病院の治療風景をテレビで観た時にナースがナースキャップをかぶっていないのが目に写り「キャップをしない看護婦さん」を始めて見た。キャップがなくても働けるのだと知った。

ナースキャップを外すには看護婦のナースキャップに対する意識の変革が必要と考える。そこで看護婦や患者さんなどがナースキャップにどんな意識を持っているかを知りたいと思い、調査を試みた。

2. 研究目的

ナースキャップにどんな意識をもって働いているかを知る。

3. 研究対象及び方法

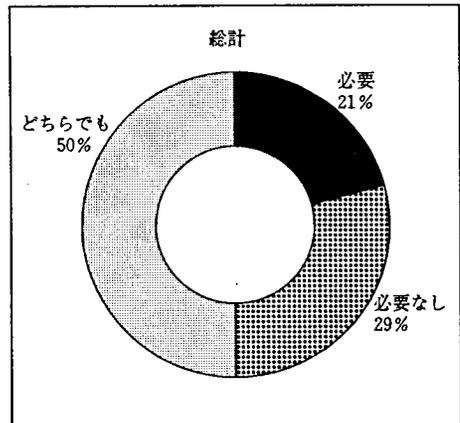
- 1) 看護婦、医師、患者のナースキャップに対する意識調査
- 2) 東2階病棟のナースが8月1日から8月31日までの一ヶ月間キャップをかぶらないで勤務をし、その前後の意識調査比較する
(東2階のナース、東2階の入院患者)

4. 結果

- 1) 外科系ナース、内科系ナース合わせて80人よりのアンケート調査の結果、ナースキャップが必要は21%、必要なし29%、どちらともいえない50%であった。(表1. 図1)

表1 キャップの必要性 人数

	必要	必要なし	どちらでも	
20才	12	11	29	
30才	0	8	7	
40才	3	4	2	
50才	2	0	2	
総計	17	23	40	



年齢別では、20才代のナースは必要23%、必要なし21%、どちらともいえない56%で、30才から50才代では必要18%、必要なし43%、どちらともいえない39%であった。(図2. 図3)

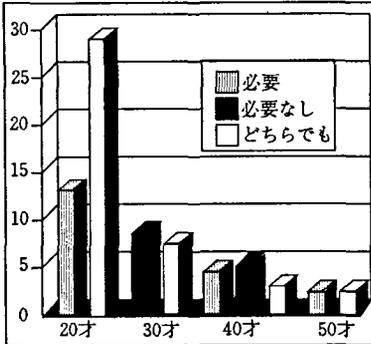


図2 キャップの必要性

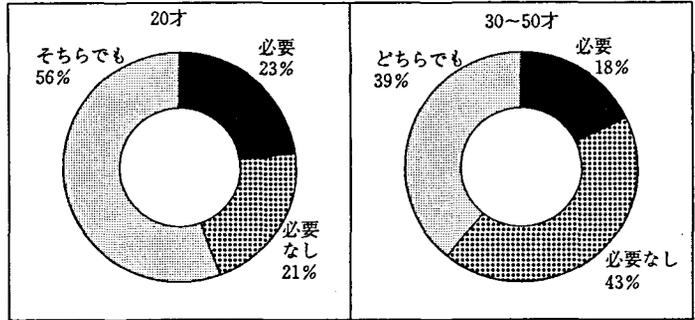


図3 キャップの必要性

ナースキャップが人や物に当たって、働きにくさを感じているナースは79%おり、またキャップをすることでなんらかの不快をおおくの人が感じていた。(表2. 図4)

表2 キャップによる不快感

	当たった	髪の毛の蒸れ	禿げた	髪吊った
20才	40	21	9	37
30才	12	8	3	10
40才	7	5	1	7
50才	2	4	4	5
総計	61	38	17	59

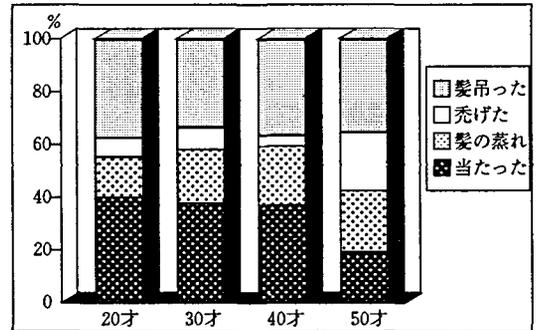


図4 キャップの必要性

なお外科系、内科系では差がなかった。

2) 東2階病棟の入院患者20人からのアンケートでは、ナースキャップは必要17人、必要なし0、どちらともいえない3人であった。看護婦がキャップをかぶらないで勤務した後では12人からアンケートをもらい、必要7人、必要なし1人、どちらともいえない4人で、あった。(表3. 図5)

表3 東2階入院患者 人数

	必要	必要なし	どちらでも
試行前	17	0	3
試行後	7	1	4
総計	24	1	7

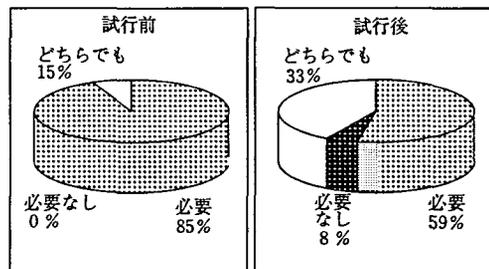


図5 東2階入院患者

また、東2階病棟の看護婦が、キャップをしなくて勤務した後のアンケートでは15人中10人が回答し、そのうち8人が働きやすかったと答え、2人はどちらともいえないと回答している。また回答した10人がキャップが無くて困ることはなかったといているが、長い髪の人の中にまとめ方に苦労したと回答した人がいた。

5. 考 察

今回意識調査した結果、看護婦では若いナース程キャップが必要と答えていた。これは「象徴だから」等の意見にみられるように、ナースキャップへのあこがれからくるものであると考える。経験を積むにしたがい、機能面で不必要さを感じてくると思われる。医師や患者は、ナースキャップが必要という意見が多く「帽子をかぶっていないと看護婦なのかわからない」「看護婦は帽子をかぶっているもの」という意見から、固定観念が根強いと感じた。また、看護婦のどちらともいえないという回答の中には、長い髪がまとめればキャップが無くて困らないとの回答が多く、髪をまとめるには便利である事が伺える。外科系病棟においては、手術後患者は複数の点滴、ドレーン、モニター類などが装着され、ベットサイドが狭いと感じることがしばしばある。こんな時キャップがカーテンや器具に当たり邪魔になることが多いのではないかと考えた。外科系と内科系では差がないことは患者の状況や看護援助に大差が無いものと思われる。

キャップによる不快の中で髪が吊れる、蒸れる、帽子が当たるについては年齢による差はないが、50代で禿げるが増えていたが年齢からくるものであろうか。長年キャップをかぶっていたことが影響しているものであろうか？

キャップをかぶらないで勤務した結果では、キャップが無くて困るということはない。これは「キャップをしない看護婦さん」で働けるのではないかと感じた。しかし回答が無いナースの中には、違う意見もあったかもしれない。

実施期間中看護婦の髪が乱れるのではないかと心配したが、スタッフそれぞれ工夫し、華美にならないような気配りもできていた。

ある患者からは「キャップをかぶっていると皆同じに見えるけど、キャップが無いと個性があつてよい」との意見があった。患者の個性を重んじる看護界において、看護婦の個性が考えられてよいのではないだろうか、看護婦の中には「キャップは権力の象徴に感じる」という意見もあり共鳴するものがあった。

6. おわりに

全世界的には、また日本の中でもキャップをかぶらない看護婦が増えつつある。私達はキャップによる不都合や不快感はあっても、イメージや象徴を大切にしていく方がよいのか。私は患者さんの目の高さでの看護をしていくには象徴は不要なのではないかと考える。今後は看護部全体でこの問題に取り組むことを希望する。

アンケートにご協力いただきました南1、南2、南5、東7のナースの皆様、患者の皆様、東2の医師の皆様に心より感謝申しあげる。

参考文献

- 1) 村尾 都子：キャップのないユニフォーム，看護，38:19-23,1986.
- 2) 亀山美知子：日本の看護婦の制服の歴史，看護，38:59-70,1986.
- 3) ：アメリカにおけるキャッピング事情，看護，38:52-54,1986.